

発語の不可能性について

山川健一

■日本の戦後史の論理的必然としての発語の不可能性

3月11日の震災の悲劇は、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、さらに長期間におよぶことが確定した。私が教員をつとめる東北芸術工科大学は山形市にあり、多くの学生が、近親者の死亡や自宅の全壊など深刻な被災をした。山形県は福島県に隣接し、原発被害を逃れる人々が当初5千人避難してきていた。現在も3千人程度がのこっており、学生の中にも福島県の出身者は多い。

こうした状況下、都立美術館で開催される展覧会に出品を予定していた多くの芸術学部の学生から、「アートをやる意味がわからない」「作品を制作できない」「退学したい」等の声が寄せられ、芸術学部の教員は頭を悩ませている。

私が教員をつとめる文芸学科の学生からも、「テレビから流れてくる言葉は信用できない」「総理大臣や官房長官は嘘を言っている」「何かを話すことが虚しい」といった声が聞かれる。Twitterには「もう死にたい」等の書き込みまであり、われわれ教員を慌てさせている。

雨が降ってきた際、私が「放射性物質の危険があるから、みんな濡れないように」と注意すると、一人の女子学生が「せっかく忘れていたのに、思い出させないで下さいよ」と発言した。

学生達は程度の差こそあれ、発語の不可能性に陥っているのである。

日常会話ができないという意味ではない。心の奥底にある事柄を、表現できないのだ。

日本では、満州の開拓へ行き敗戦後に現地に残された人々や、政府に背中を押されて米国のカリフォルニア州や南米諸国に移住していった人々などが「棄民」と呼ばれることがあった。今や多くの学生達は、自らを汚染した大地に棄てられた「棄民」であると感じ、押し黙っているように見える。

女子学生達との日常会話では、「子供を産むのはもうあきらめたほうがいいと思っている」とか「これからの恋愛小説はきっと変わらざるをえない。それは出産が一か八かのギャンブルだからです」などといった声も聞かれる。

学生達は放射性物質という名の見えないものに対する気持ち悪さと、恐怖と、長くつづく緊張感に慣れていかなければならないのである。

原発被害——放射性物質による汚染は北上し、都内の土壌もかなり汚染が進み、さらにあちこちにホットスポットがあることが報告されたことなどから、学生達のこうした傾向は加速度的に全国に広がっていく可能生があるだろうと思う。

こうした学生達に、「言語・文学分野」の大学教育は、どう対応していけばいいのだろうか。どんな品質を保証できるだろうか。

今回の震災と原発の事故は、国難と言っていいレベルのものだ。この国難は、おそらく第二次世界大戦の敗北以来のものだ。戦後の荒廃から立ち上がった日本が繁栄を実現し——それがこの3月11日に大きな転換を迫られたのは、少なくとも原発の事故に限って言えば、論理的な必然だったのではないだろうか。

1950年代の始め、日本は貧しかった。高速道路はもちろん、舗装されたまともな道路も少なかった。広島と長崎に原爆が落とされた日本には、冷静時代の米ソの核実験によって放射能の雨が降った。

日本人の原子力への反発とアレルギーは、第5福竜丸事件で決定的になる。この事件は広島と長崎につづく、日本の第三の被爆であると位置づけられた。

反米と反核の世論が高まる中、しかし日本はアメリカの援助を受け入れ原発の開発にのめりこんでいったのである。貧しかったからだといしか言いようがない。原子力の平和利用というスローガンで日本に入ってきた原発は、いわば第二の「黒船」だった。

1957年8月27日、茨城県東海村の日本原子力研究所第1号実験炉が臨界点に達し、「原子の火」がともった。前年のインドの国産原子炉稼働に次いで、アジアで二番目の原子炉稼働国となり、原子力時代の第一歩を踏み出した。

このことは明るいニュースだったのであり、原子炉の完成を祝って子供たちが旗行列する様子が報じられた。かくして日本は官民一体となり、2011年3月11日まで、ひた走ってきたのだ。

かつて「近代の超克」という言葉が流行ったことがあった。この「近代の超克」は対米英開戦という時局のもとに行われた、河上徹太郎を司会に行われた有名なシンポジウムの名前である。1942年7月のことであった。「明治時代以降の日本文化に多大な影響を与えてきた西洋文化の総括と超克」というのがこのシンポジウムテーマである。

そのほぼ十年後に、日本は密かに「黒船」を受け入れ原発の開発をスタートしたことになる。件のシンポジウムのテーマは、明治時代以降の日本文化が、

西洋文化を超克できるのかということだった。日本は近代の超克に失敗したのだと言う他ない。3.11は明治維新以降のあまりにも悲しい日本の歴史的、論理的必然だったのだと言うべきなのかもしれない。

「言語・文学分野」に引き寄せて言うならば、かくして日本の戦後史は発語することに困難を覚える多くの学生達を生み出してしまったのである。

■世界は言語でできている

明治維新に始まる日本の近代化は、言うまでもなく「言語・文学分野」にも及んだ。言文一致運動というものがあり、文語からわれわれがいま普通に使っている言葉で小説も書かれるべきだ——ということになった。

夏目漱石や森鷗外、二葉亭四迷などが「意識」というものにこだわり、それまでの物語や戯作とはちがった「小説」というものを書き始める。

こうした近代文学を対象に、やがて批評というものが生まれる。文芸評論と言われるものだ。いろいろな説があるが、最初に批評というものを自立させたのは正宗白鳥だと言われている。その正宗白鳥とトルストイ論をめぐって「思想と実生活論争」を繰り広げた小林秀雄が、批評というジャンルを確立した。

小林秀雄の批評の方法は非常に真面目で、しかし考えてみればシンプルで簡単なものだった。ある作品を批評しようと思ったら、その作家の作品を年代順にすべて読めばいいのだ、と小林は書いている。小林はできれば日記や書簡や作家の創作ノートも読めと言っている。

このようにすると、何が起こるか？ 対象作家のことがよくわかるようになる。彼らのことがよくわかると、その作品が名作か駄作かということなどどうでもよくなる。出来の悪い子ほど可愛いと言うが、彼らの失敗作の中にこそ、かえって裸の作家の魂が垣間見えたりするものである。

小林秀雄を軸に据えた文芸批評が支持されたのは、高度経済成長の時代である。

団塊の世代の子供達が大学に進学するようになり、女子の比率も当時飛躍的に拡大した。全国の大学の文学部が、こうした大勢の大学入学希望者の受け皿になった。

知識人と言われる小説家達の作品を、一冊目から順番にすべて読み研究すると、知識ばかりか人格的にも成長することができる——そういう暗黙の了解が大学関係者や父兄、学生自身にもあったはずだ。

しかし、そんなことではそもそも文学論（批評や学問）というものが成立しないではないか、ということになってくる。テキスト論（作品論）が登場したのである。

テキスト論というのは、ある小説を読む場合、作品と作家と完全に切り離して読むことが可能だ、という立場である。そこでは小説家は人格者である必要も知識人である必要もなく、問題なのはテキスト（小説）だけなのだ。

そしてすぐに、構造主義の文学への援用が始まる。構造主義というのは、たとえばアフリカの文明はヨーロッパの文明より遅れているわけではなく、その構造が違うだけで等価だという考え方である——と私は理解している。それぞれの文明はその構造が違うだけで等価だと論じたレヴィ＝ストロースは、物事の見方を相対化したのである。

構造主義が流行った頃、「差異」や「異化」という言葉がもてはやされたものだった。

今ではそんなの当たり前だと多くの学生達は思うだろうが、こうした考え方の登場が、とりわけヨーロッパの人々に与えた影響は計り知れなかった。

その間、哲学・思想・文学の世界は大きく変わっていった。

文学の世界では、作家論→作品論（テキスト論）→構造主義の登場による価値の相対化→ニューアカデミズムによる単一的な価値の否定→そして遂に、ポスト構造主義（ポストモダン）による「世界は言語でできている」という結論に至る。

卑俗な例をあげれば、「多目的ヴィークル」という言語があのような自動車の登場をうながし、「都市」という言語が街を形成したということになる。「お花見」という言語がなければ、桜の花の下であのようなドンチャン騒ぎをするのは狂気の沙汰である。人間は、言語の豊かな森林によって生かされているのである。

最近、若い人達の間で「心が折れる」という表現が一般的になった。なぜ、心が折れるのか。それは、現代における心というものが乾燥しきっているからだろう。

湿った心は折れることはないはずだ。心は、本来は萎えるものだ。

萎えるというのは「植物などがしおれる」という意味なのであり、しおれたとしても折れることはなかったのである。

鉄とコンクリートとガラスの都市で生活しているうちに、若い人々の心は渴

ききってしまった、萎えるのではなく折れるようになってしまったのだろう。

もう一つ参考例をあげる。「キレる」という言葉である。

昔は、怒りは下腹部にたまるものだった。「腹に据えかねる」という言葉にそれがよくあらわれている。腹にたまった怒りをなんとかおさえようとして、だがそれも限界だ——という気持ちがこの言葉にはよくあらわれている。

やがて、「ムカつく」という言葉が登場する。ムカつくのは胸で、怒りが宿る体の部位が上がったことがわかる。

そして、キレる。

キレるのは脳の血管で、とうとう腹に据えかねた怒りが胸を通過して脳に達したことがわかる。脳の血管が切れてしまえば、人は即座に意識を失い、場合によっては死を迎えるしかない。

われわれは、心の瑞々しさを取り戻し、脳内の怒りを胸に、そして下腹部へとゆっくり押し戻していったほうがよさそうである。

さて、ここで問題にしたいのは、「心が折れる」「キレる」といった言語が存在する、もしくは登場したからこそ、こうした言語が描写する人間の心の状態が現出したのかということである。それとも前言語的なカオスの中にこうしたこうした心の状態があり、それを言語が描写してみせたということなのだろうか？

これを明らかにすることができるならば、なぜ多くの学生達が発語に困難さを抱えているのかを推察することが可能になるだろうと思う。

政治家の言説に嘘を見抜き国家に棄てられていると感じる多くの学生達が、実は前言語的なカオスの中に様々な言葉を抱えているのか。それとも、そんなものは存在せず、ただ空虚なのか。考えてみれば、これは非常に難しい問いである。今の私には、判断することができない。

■セルフポートレート

作家論と作品論に戻る。「世界は言語でできている」という結論に至った後、文学や思想の世界は著しい混乱に見舞われることになった。それはあたかも、日本という国家が揺らいでいるのに足並みを揃えているようだ。

日本という国家が溶解しそうな現場を、学生達は日々のニュースで見る。こうした中で、作家論かテキスト論かという以前に、文学あるいは内的言語（心の奥底にある事柄を表現する言語）そのものの力が弱りきってしまったように

見える。

いわゆる文学的言語というものは、消えさってしまったのだろうか？

こうした状況の下に登場したのが、ブログや Twitter というインターネット上のコミュニケーション・ツールであった。そこでは、学生達は押し黙るどころか、饒舌に語りつづけている。日常的な些細な事柄から、恋愛や直接的な欲望、死への願望まで、大人である我々が見るとあまりにも赤裸々で「大丈夫か？」と心配になるような事柄が、語られつづけている。

多くの人達を書くネット上のコンテンツは、あたかも万葉集の時代が再来したかのような空気をさえ感じさせる。それらはもちろん玉石混淆だが、はっきりと日本語が支える世界が変わったことを告げている。

明治維新以降、漱石や鴎外などの知識人が書いたことを、下々の大衆は読み続けてきた。こうした、いわば上意下達の構造にピリオドが打たれたのかも知れない。

学生達の日常生活に必要なのは、今や「上意下達の文学構造」でもなく、「差異」を発見する思想でもなく、日常生活を「異化」する芸術作品でもないのである。

異化作用としての芸術ではなく、右手を差し出して「世界」に握手を求めるような作品（同化作用）こそが彼らの心を癒すのだろう。彼らが求めているのは身の丈の言葉で語られる希望であり、知識人の難解な作品ではなく「私はここにいます」と小さな声で語るインターネット上の言葉である。

しかし、彼ら相互の関係性は非常に希薄であるように、私には見える。内面的な言語を封印し、顔文字などを多様したコミュニケーションはあくまでも自分と相手とを安全圏に置いているからだ。相手との距離感がつかめないから、唐突に「死にたい」などと書き込み、周囲を慌てさせたりするのである。

さらに言うならば、学生達はレポートにおいて与えられた対象について論述するのは得意である。それは高校や予備校でのレッスンによるものだろう。だがこれはあくまでも「スキル」と言うようなもので、当該対象に真剣に向かい合った結果の言語であるとは、とうてい言い難い。

「言語・文学分野」の大学教育において、彼らの中に瑞々しい言語の森を復活させる必要があるのではないかと私は思う。彼らの中に存在する「ブログや Twitter における言葉」と「過去の豊かな森としての言葉」の間に、しっかりとした橋を架けてあげる必要がある。それが果たせた時に、彼らのごく自然に発

語できるようになるのではないか。

ところで、私もブログや Twitter を使用しているが、たまたま今日のツイートに若い母親達の日本語をめぐるこのようなものがあつた。

□教育のことを考えると国家に行きつく。思いは途上国のお母さんとそんなに変わりません。英語はコミュニケーション・ツールだと思っていたけれど、日本語の情報だけでは危険極まりない昨今、英語はビジネスで不要な人にとっても生きるためには必要なサバイバル・ツールだと思うようになりました。娘が大人になるころは日本語はあまり重要ではなくなってるかとも思い始めている今日この頃。もはやコンテンツが増えていかなさそう。アイヌ語などのように民族文化の位置づけ。(都内でホームステイスタイルの学童保育室を運営している女性)

□娘には日本語が出来ることより、中国語に重きを置き始めました。残念だし寂しくはありますが。(汚染を避け日本での仕事を捨てて、シンガポールに移住した女性)

□日本語や文化が廃れない事を切に願っておりますが、同時に強い危機感も感じているのです。日本はいい国です。ただ、次の世代にとってもいい国であるかは強い危惧を持っています。日本でしか生きられない子供には育てたくないです。(都内在住の母親)

日本という国家は、制度である以前に日本語である。日本語が減る時、日本もまた滅亡する。「言語・文学分野」の学生達には、卒業時には研究対象を体系的に論じる力を身につけさせなければならない。学生の力量によって対象の大小(スケール)に開きは出るだろうが、いわば予備校型の「スキル」としての論述ではなく、自らの内面の深い部分と対話することの中から紡ぎ出せれる瑞々しい言語の森の構築を可能にしていなければならないだろう。

東北芸術工科大学の芸術学部の学生達は、自画像を描くことが必修とされている。「言語・文学分野」の学生達にも、発語の不可能性を乗り越え、言葉によっていわば自画像を描くことができる力を得ることを、われわれは品質保証すべきなのではないだろうか。